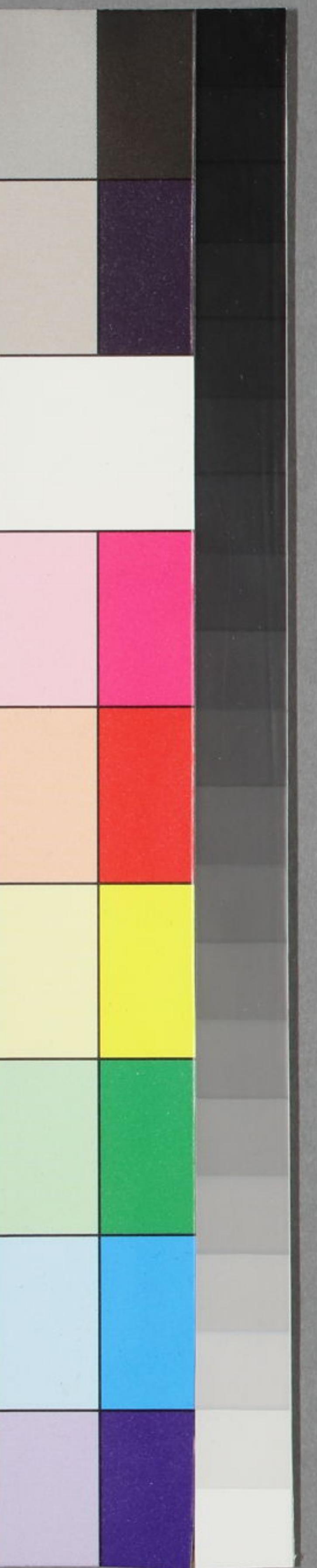


30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4

岡三  
慶著  
今昔較  
上



まつしん物記うちの風の口序  
東西直隣の事よ所中をと  
そ代り小脚免の此筋より  
業者多く仕立候ひゆきゆを  
農免油すほ一休 諸君ハ傍  
音ぬき者を今どハ孰づ宜み

岡三慶著

性體而當

今

皆

くら

道



都も相別あるらず一て要た  
湯弓首傷あきあらがふる  
角馬昧は者やうづの者、の巻  
男ひますゆ固く僕うけ年少  
昔古村情をとむる柄を教へて  
せまく沙羅かきますすら相今昔

うち庵ややますすきハ毎圓昔ち  
子情掌レシホ内情をき斐斐ベニテ  
是昭ハ看官おまふ任す任すのあま  
まう坐つてすり十小五六とせん  
通ふいぬ一拂拂ぢづくふくハソモ  
一樣弓斗り立りすゞて舞臺舞臺たい

が西白く見えぬせぬのう様ふ  
あうえ跡を携て學考多ひ  
後悔又お様ふひづきまつて僕の  
身の通を譲りてお賢ふつる因も  
餘程ゆまいますうちへ授まつた  
るやうせりますのう馬足を古魯  
だんと

を射ます御迷惑を是序を  
様く様と空ハ前と移すの者あり  
ずして書稿の手取れやう代  
替する事あつてあるある  
時承階七年十一月一日

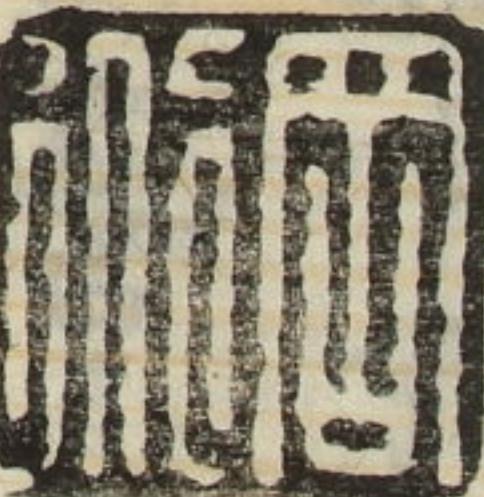
今昔較

自序

東京化ハア語の住色の通称  
ニ慶坐りよ

國蘭卒近人誌

酒井生畫



今昔較上之卷目次

邦制封建と郡縣とのもと

言語郷音と普通詞

小便所臭穢と清潔

舉人門地と因るとするさる

士風江戸子の潔と東京娘の潔

布告書陋俗と雅馴

手紙通と不<sub>フ</sub>

乞食可憎と可憐

獻書 雜と易

今昔較下之卷目次

株 千九百九十九の古株と礼株との類型

髮形 古風と西洋風

暦 太陰曆と太陽曆

渡質と開化風

世情議論と商法

船 西洋造船進歩と日本造船進歩

家 燒屋と不燒屋

目次終

今昔較卷之上

東京 岡蘭平著

封建と郡縣との較ら蟹 以下毎回較  
字を累す

我日本より人皇第一代神武天皇より、八十二代後鳥  
羽帝の比迄ハ、郡縣の邦制とく行し也。然るに五十  
四五代仁明文德兩帝の比より、藤氏稍王憲を昇り  
始免。尔後六十二代朱雀村上兩帝の比ふてハ、  
大權全く藤氏の掌握ふて一より、所謂莊園功田  
等次第くに倍て封建の種を蒔。後鳥羽帝の朝より

大權再轉して頼朝の手のみに因る。封建の種始て収生の期を得。源氏を生し。九十五六代醍醐光嚴兩帝の元弘建武の乱ふあり。其牙頗成長の姻を得。九十七代光明帝の朝ふニ轉じて大權全く尊氏に属せ。以來天下大半封建の形勢ふ変じたまども。足利氏より天下を取るの愉快を知る。國を制すを知る故。漫々其因て来る勢ふ隨く功臣を封する耳。にして封建より郡縣よりも聰と定れる國制なし。足利氏より名耳。愚ちよりて義滿死し。後ハ足利氏より名耳。

將軍たゞども。大權室中に懸りし雲の様みに何とふ歸セと云ふ事あく。徒ハ歐洲の同盟政治と云様成形みく。山名細川の兩家を捨て盟主の様成者となる。各自の都合ふ隨て或ハ山名ふ属一。或も細川ふ黨にて定む。徒ハ兩黨威權を争ひ一途のみ。多年の星霜を送り一也。かく馬鹿。収多年争ひ一より。足利氏の末葉ふ至ても。あくまくいつの方か。天下割據世界ふ變へたり。是を以て織田氏ハ。霸統を継たまども。其實も全き割據世界也。割據世界とも早く言へハ。強

者勝の世界と云ふべて、敢て國制ハいうき者と  
云事も知らず。唯安ふ強を競ひ。日本八々州民衆多  
ふく割き分け各自一方の要害を據り。我こそ天  
下の英雄也と云。自分天狗ちるを割據世界とも云。  
俗み天下二十八天下ちど云ハ。うる時節を指く  
云洞也。是の時ふ當り。織田氏震代の英傑みて其力  
量高く天下の豪傑の上ふ出そ。夙々天下一統の業  
ふ心附万々をそそぎ。乃々ころす。志つづく。其  
事成さりし。豊臣氏能其志を繼天下を混一ふ。歸

し。天下の大小名を封して國を建しめ。自大權を握  
りて其争競を制し。大小名をして其所を得せしめ  
し。因て始て我日本全き封建となりたり。惜哉。豊  
臣氏も邦制の辨を知らず。徒ふ其因く未だ勢ふ隨  
て天下の大小名を封し。國を建し。迨の夕ふく。  
國の形勢を改制して大小名をして各自分をすり  
相踰越する能ハざらしむ。乃策を知らず。故ふ天  
下の諸侯胸中常ふ強者勝の愉快を忘る日なく。  
動較き。天下再び乱んとす。秀吉早く其機を悟り

己の災を他ふ移り以て天下の危急を拯んとする。是徳韓の舉行所以也。夫徳韓の舉ハ己の禍を他ふ移しの妙策也と雖國乃基き本立たてと以て秀吉死したて後のちの直ま元もとの割據世界に還もどりたり。然る小家康徳川氏不世出ふせつしゆつの神力を以て、夙そよふ國制の辨べんを明あきらめし、東征とうせい西伐せいばくし、忽すこ天下を統一とういつふ歸かきし、大に國形を制せい改かし、子孫こを大封だいほうし、東西とうざい小分こぶんて大牙おほのしの勢ぜいをもす。天下の大小名おほなを江戸えどに常じつ在ゐして割據わりきょの念ねんを生うれり。及およて己の羽翼はりたらむ。是則これまことに古人こじんの所謂いわゆる毒どく

を變へして藥くすりとあり。禍ごを轉ひんして福ふくとなすの妙法也。而り然しかりして尚まだ且代官所しろくわんしょを天下の諸侯しよこうの間に分置わけて、天下あひだを制せいするふ皮はを隔へて痒いたを搔かくの憂うきひもりらむ。是これが於て諸侯踰越ゆくさする能のくざこを以て止とふくを有うりて職つかを奉ささぐの外ほかに他事ほかごなき也。是時このとき至いたち邦制わがせき全ぜんく封建けいせいあるども、實じつ封建けいせい制せい中なかふ郡縣ぐんけんの制せいを交かて時宜じぎふ適てきや免めん一者ひとしやくにて实じつ不ふ前まへ一種いっしゅ種しゆの封建制けいせいせい也。米國べいこくハ合衆政治あいしゅうせいじと雖ま、其その實じつ無む前まへ一種いっしゅ制せい也。古法中こふわくちゆうより別べつふ一種いっしゅの別手段べっしゆだんを見みるを見みるゝを畢竟畢竟封建けいせいと

云へ割據と云へ其名を異み多政を異ふまきど  
も其實同一ちるを以て封建世界の所謂國主大名  
も山谿の險を以て國界とす。其通路の口ふ閻を  
設置て他州の人の出入を禁し是より以内も我領  
分也と云て、とも同く六十餘村内ふ在す。他州  
の人と交らぬ権威大弊を起す也。獨り國主大名斗  
り然ふ。おほらす天下の大小名より所謂舊奉の士  
ふ亟々近聞。争ひる。争ひて互ふ。是より以内も  
我領分也と肩臂を絆て界を競争ふて天下の公

義の如何を知らざるより天下の大害ふある事じも  
至て多し。今其害の一ニを舉てふ。セハ火輪船の運  
用。今の如く開り。上ふてハ万里の波濤も喰と  
すに足す。西の盡處小在。一と思ひ居。天利下流を  
反て我日本乃東ふありて。我と隣國とるり遙々遠  
き圍霧海不乱湖乃如きも蒸氣船ふて往来されハ  
反て昔江戸より長崎迄遠々と陸を歩み行よりハ  
近くあり。時節とあり。ハ世界中乃人民ハ皆兄  
弟也と廣く心を持ねを。昔の大

小名の桜成筆風ふくハ便利の處へ交易場を開ん  
と欲すまじも。此支ハ我の領令みて。我も日本竟  
うりて。異人姫ひ也もと云て。妄ク小劍戟三昧をし  
て。駢き立ちど云甚矣大害なり。又甲の領分みて。  
乙の領分の水を引灌げハ數万頃の田常水場とな  
りて。永く旱魃の憂ひを免き又ハ數万頃乃新田を  
懲らべきよ。有餘の水を惜みて灌しめす。空く流  
て海に帰セむ。且夫上  
を掌ふも下の習故。下民も領分違の故を以て互に

争ふ心切るを以て動輒きも境論水論等を生一易  
く。又も代官所及強藩の民ハ。も領主乃威威假て。小藩  
及旗本領乃民を侮り暴に鬭争を仕掛けず。云甚  
害ありト也。而して代官強藩等も亦妄ク小已乃  
威を強て。すの是れふ拘らず。意找曲弓を誣て。己の  
民小勝を與ふ。是故以て強藩代官所の民も。常々暴  
虐を恣ふして。小領乃民ハ常々薄氷を踏むの危懼  
を懷けり。是等の弊害ハ於テ邦制の勢然らずむ  
也。夫封建世界ハ大權一ふ取ると雖畢竟歐人の

所謂同盟政治と其趣義同一、天下の大小名と約束を立て、天下を治る策以て大政十に五六を天下中大抵一根もきども約束外の小政ふ至らず、其領主の了簡次第あるを以て藩々皆其政を異みて天下一様あらず。是を以て學文の繁昌する領分もあり、博奕乃戯なる土地も擊劍を好む藩もあり、又懶惰上下の風をあせりもひりし也。右の如く約束外の事ハ天下皆政を異ふをきども、舊政府より是哉制す多乃權なるり。故、惣吾の如き俊秀の士を虐殺せ

一佐倉侯の如き暴君出来て、痛く民を虐せしも亦邦制の然らむる所也。郡縣とハ、令の様す國制也。乃よふして、詩經北山の篇、溥天に作せりの下、王土ふあらざるなく、率土の濱、王臣ふあらざるなしと云如く、六十餘州盡く一手の支配ふ歸し、土地も悉皆天子の領分にて、人民悉皆天子乃臣分にて、別ふ是ら我領分也と云地ハ絶てなくなり、直ふ一政府より各縣へ多くの官吏を出一て大政を分布セしむ。今乃縣廳ハ畢竟太政官の取次所分にて、昔乃諸藩及代官等の其支配小々於て、威權を專ふ

セイ一者とハ大遠り是を以て政大小とおく六十餘州盡く一小歸する也。夫六十州も至て廣い。故ニ政一也と雖盡く是を以て止おく六十餘州を分轄する爲ふ六十餘の縣廳を設く。然りと雖六十餘が一年の支配かして畢竟全國一家も同一きを以て、別ふ國界開字（ふざいひせき）（縣制ふくしりく）國の分ちハ、いら易き様ふ。旧習小從ひ。某國某國と云称呼を。今にても用ゐる也。等へおいていらぬる故、今ふてより從前所々嚴重ふ設ち置き。開も盡く廣い。六十餘州を一軒の家の様なしたり。是が於

て天下の人始て往来の自由を得て、手形なしに六十餘州を隅りう隅迄東西南北乃差別なく見物人歩きとも。詮咎（たれとうご）する人もなく、縣廳へ伺ひまへときハ、勝手次ゆふいつきの船へも引越出来、何きのふの水も事ふ害る。國ふ手形をも引催人へ、電信の傳線も。日本國中蝶の巣の如く引催るも、交易場をいつきへ聞くも、誰も否む者なし。闘争を下すも人民の權力皆同一きを以て偏倚の裁判する六十餘州中於て一様の政也。右の如く天下一政なる所以て。

懶惰の土地多く博奕擊劍の流行する縣多く學校  
ハ六十餘州の内も津々浦々ふ至る迄盡く同一根  
ふ設置て同ト様ふ學也一久同ト様ふ全國の人を  
以て文明開化の域ふ樂ましめんとす是則郡縣と  
封建との今昔の大畧みてくら融合せの最著支  
乃き也故ふ此篇ふ於てハ實又以因を以て比較  
の最初一例もす盈ききの故看官尤力を入き读玉  
へて予の舉るふふ足を補ひ以て其是深め如何  
を決し玉へう

## 言語

國制の率を以て熟考ひきも蓋古郡縣の世ふハ  
六十餘州の内佐渡對馬等の島々を除くの内地  
ハ都て郷音少々寃の遠ハ行る屈けきども言語ハ  
大畧一様あるあり一なる所。其故如何と存きハ  
割據の時封建の時等お於てハ各自險ふ據り國を  
守て關を置て嚴ふ他が人の出入を禁ずる故常ふ  
隣州の人と言語を通さざる寡く。唯其州人と斗ク  
互ふ語り合ふを以て始鄰あと同一うり一辭も年

を經る。又隨ひ知らずく變化し。數百年の後又て  
ハ語脉盡然全く同一からき。あ様ふるを必至の  
物也。是と云ひ我邦又も西洋各國の如く。假と定せ  
る語學西洋ニても古ハ語学假と定まらざり。ヨリ。  
文明の今とまりてハ言語の則全定まり  
ト云者を以て。其時くみ流行辭出未だ。不  
隨ひ舊詞ハ新辭と次第くみ移行き其極を知。さ  
は故也。假令て言へば近年異人調異國人日本語を  
習ひ覺へて頗る巧ミニ使ふと雖。自然甚  
調同しからず。故ニ假ニ異人調と号す。是が漢語  
追々ふ世間ふ流行をよより。今ハ言詞頗る變化し。

舊語ハ次第ふ世ふ疎せらば然生じ年高の者も、  
是ハ舊語是ハ新辭と盡く其別を知て。新舊の差別  
多く用ひ通じて能ヘテ指支へゆきども。今より成  
長する者も。只新語斗リを習ふて舊語ハ悉く習ふ  
と云ふあらざる扱。數十年の後ふち。今の舊語ある  
者ハ盡く古語の様みなり。竟みと註脚を下さざれ  
也。うへは變化一易き道理み就て。古の事を熟考す  
きも古那の時一樣なり。縁も割據封建の年を

倭乃久處各自國々の辭弊語殊自然に變へ。一種の  
鄉音の様な有り甚矣遠ひを起セリ友はへ一然了  
ふ今乃如く郡縣となり開も友く國境もなく。凡十  
餘州の人一家の人乃如く親く交りて差別をき時  
と有りてハ是ハ我國詞也と人ふ對して己の鄉音  
を誇きとも天下の人其國詞を知らざるを以て。事  
子不通すは故、餘義古く已の國詞を舍て、天下一般  
み通一易き辭を早く学んで用を辨とはハ是亦人  
情の常よりて必然の勢也。此必然の勢不因てらず十

餘州の人盡く從前<sup>ぢうぜん</sup>の國詞を捨て競て天下<sup>ふくわい</sup>の通一  
易き辭を學んて止<sup>やま</sup>は時ハ予多年<sup>じゅげん</sup>よりすにて日  
本國中<sup>こくちゆう</sup>の辭必一ふ般<sup>ひん</sup>あるを知る也。夫言語ハ畢竟  
人の意を通一<sup>しゆ</sup>を辨するの道具故、<sup>が</sup>俗の辨ハ姑  
く捨て普通を以てす。一とえを極<sup>ひ</sup>く如何<sup>いかん</sup>も。  
大和詞ハ聽されども試<sup>よ</sup>天下の人ふ對し、大和詞  
を使ふ時も百人の中一二人も解<sup>さ</sup>得<sup>べ</sup>ぬ者ハ無<sup>い</sup>  
く。江戸辭を使へハ大抵百人百もうち解<sup>さ</sup>得<sup>べ</sup>  
候<sup>う</sup>。余故<sup>ゆゑ</sup>曰普通を專一<sup>せんいつ</sup>すと、且夫歐<sup>う</sup>洋の

内ふゞ佛語ハ雅ム一ト英語ハ俗ムモとも。英語ハ世界中専廣く通ム。以て歐洲の人交易の為小他國へ出帆せんと至ル也。必先英語を学んで而る後啟行ち云ヘリ。是ふ依リ是を言ヘハ。詞ハ駄々ヨリ普通を以テ專一ト有ム。世界一般の事也。因て此ふ所謂江戸詞の日本ふ於テ。然英語の世界ふ廣く通ム。如く六十餘州ふ普く通し易キ也。甚扱め何者も御シ言ヘモ。東京開都以来。殆三年の弓。大小名の藩士。代々來り。在勤し。且日本第一の

都會支那を以て。六十餘州の人代々東京ふ出。或ハ貿易を主。或見物す是を以て江戸詞も廣く八々州ふ通ム。也。かく八々州ふ廣く通ム。江戸詞故。今ふゞ日本の普通詞となるを以テ。六十餘人。乃言語。次第に江戸詞の一ふ取。主乃勢あり。うく。一ふ得。主勢ある故。方今ハ昔の様。人の语音を聞。其人の生國を的知。と云様成。ハ絶て出来ぬ也。六十餘州の言語。一ふ歸。主。尤。本。き。の一事也。故ふ前回と參攻。一。モ。封建郡縣の是服をよく。決。一。五。ふ。ハ。

## 小便所

廻まわの腫物たれもの所ところきらかす。欲尿うきままことの出来あはハ、小便こべん計けいり也。ヤレ古免ふきめんされと云いて。青天白日大道だいどうの真中まんなふ突立つったて、人乃隠くらすへきふを殊更へだ出だす。傍若無人そじゆじんるる状態じょうたいをうすハ、江戸えど子この猛氣きと云いて。昔むかハ常つねふ多く見うる景色けいしゃくおて、當時そのころハ少すくないも怪あやむ人ひと多く反ひて好すき習ことと思おもひう。傍わきを通とおる人ひとも莞尔くわんにと笑わらうら戯たごひまで叫さけびちてきて、大きいい。明日あすハ的てき當あ雨あめ降ふりと打たた無な一通まい遇まつり相あわる勢せい故ゆゑ、便べん和わ

極きりと云いのなく、川かわ勿論ぶろん溝くぼへやたらたら便べん一偶ひとくじ定さだき了さだ便べん和わありいも、便槽べんそう玉たまてたま小こきく、且玉たまて屎末しはんふふ一いて、便べん去了いた人ひと日ひふ幾千人いくせん去了いたを知しらう。便槽べんそう不充ふそく滿まつ一いて、四外よつがい不溢ふあふ大お道だいへ流出りゆしゆ。川かわ常つねふ便槽べんそう不充ふそく滿まつ一いて、四外よつがい不溢ふあふ大お道だいへ流出りゆしゆ。川かわをもすナを以うく、冬日とうじ嚴寒げんかんの時ときも臭氣氣くさぎと鼻は貫くわんく、況かや夏日ひ炎熱えんねつの盛さかる時ときをや、誰だれ其その臭にお不堪かん了り者ひとあらんや然ぜんりと雖ま右う述しゆ一い如いく便べん和わ定さだりままきも川かわ溝くぼ等などへ便べんもども、夜よハ川溝くぼへ便べんもる者ひとちく、犬猫いぬねこ

の如く妄り尔人の門戸不便ト、或ハ大道の道中へ向て傍若無人ト便まる故、往々は木の人の衣を汚シ、且醉人もとハはし人の臺所へ小便を灌トするも多うリト云ヘリ。是も横丁新道等々く前臺所の然る所今乃やき并化の世界也。右方如き木為ハ都々野宿風ソテ禽獸等ト云て痛く賄シむ。故、詫も妄リ不便まる者もく。且便木の制も齊整となり。昔の田舎人も競賽錢を貢ふ者も必ある程ニ奇麗なる小祠の如き白塗の小屋を隅うら

隅迄东京中尔衆多作り設みて便所とす故、いつもの所へ行ても、便臭不苦む場處ハ絶てなし。

人を擧了門地不よるとよらさずと

大智英雄ハ人類の命脉天下の至寶也。是以て古先王の人を擧用ひ玉ふ敢て其門地を拘り玉ハシ。唯天下の俊秀者を徵一玉にて委ねる大任を以て玉ふ。是を以て明智英傑常爾朝不滿て大政を補侍し。天下を泰山の安き尔居て能數百世め今尔傳ふ。然る所中葉藤氏大權を恣フ。門閥の勢漸を

以て威とましより、特不門閥の士耳を擧任して、知  
能俊傑をして草野の間シテ死キリセムより、大縁  
遂カ死カ日月光を消す。是時當り、頼朝早く茲ミ見  
はありて、盡く天下の豪傑を籠絡ラブロクして謀を帷幕マツタケ  
中ナカ禪チ一ヒ是シ不ハ於テ、詛歌訟獄カツウトウクを了スルの競キモて鎌倉  
小詛歌訟獄カツウトウク、朝覲チヨクニを了スル者ヒトも亦争バタフて鎌倉カマクラ  
了スルを以テ、遂カ大權永アマタクニヤマツキく武門ムモンを坂ハシちるムツルとハ有り  
ぬ、然シテ是シ鎌倉氏カマクラノミツも創業スルキニの日ヒハ举人ヨウジンの法ハシマツハ敢ハズて  
門地モンドウと既シテは不ハ抱ハサウリタリ、小コトハ傳ツタマツへて數世ソウセイの後アフタ

至シテも、被ハサウたる門閥の士ムモンノヒト其根ハシメを深ハシク、其蒂ハシメを固ハヂカタ  
るより、威權頓ハシマツふ衰ハリカタふ。是時ヒトツノヒトツ不ハ當ハシマツ後醍醐天皇アフタガハシマツ震ハシマツ世セ  
の明聖睿武カツウタツハシマツふまりハシマツ、ひハシマツ自奮ハシマツひハシマツひハシマツ普ハシマツく天下  
の士ヒトを招ハシマツひハシマツ、因ハシマツて天下の英才エイギ能俊傑ハシマツの士ヒト、朝ハシマツ不ハ響ハシマツ  
應ハシマツ雲集ハシマツ、鎌倉頓ハシマツふせふ。然シテふ門閥の士ムモンノヒト草野の士ハシマツを  
輕侮ハシマツしたより、豪雄ハシマツの士ヒト皆ハシマツ足利氏アシガシふ懼ハシマツ、足利氏アシガシ忽ハシマツ  
然シテ大不振ハシマツ、然シテふ足利氏アシガシハ英豪エイゴウの心ハシマツを揆ハシマツを知ハシマツ  
て是シを罷ハシマツ格ハシマツした法ハシマツを知ハシマツば、是シを以テて、義滿ハシマツ死キリして  
後アフタも門閥の威權ハシマツ其主ハシマツを凌ハシマツくふ玉ハシマツりたり、然シテきよも

幸ふ天下の中ふ雄傑を籠絡したるの法を知る者一人もおうりし故ふ天下の士歸ちるふを知らず徒ふ或も細川ふ属すもあり或ハ山名等ふ依頼したもある耳なりと以て足利氏も將軍の名耳を永く數世ふ傳へ一也然れども右の如く義滿死して後ハ英雄豪傑を愛する者もき故天下の士歸とは序を失し浮雲の虚空ふ懸るう如く木葉の大海上漂ふ如く漂々として東西南かく探し歩く是別足利十四代の間ハ殆寧日えき所以ふ

て後竟ふ割據世界もまた因縁也尔後割據乃世界となり武田上杉毛利等の諸氏の如き士を愛せざほと云ふもあらはきとも其愛特ふ方隅ふ止り天下ふ及ばず是時ふ當り織田氏早く愛士の德能天下を得ふ足はるを悟り敢て既往と門地と較問ふるく勉め普く天下の士を招く惜哉其胸腔の廣うらざると其人を擇らふ乃法を知らざればとふて妻ふ凶暴殘忍の光秀の如き者を愛せり故を以て遂ふ其攻ふるより一般土ふ塗はる了り豊臣氏覆

代の胆ありて其胸飽迄廣く。且其身卑夫より起  
を以て人を抜擢も。唯豪と智とを擇んて其他を  
問ふなし。夫濟とたゞ天下の多士。義滿死して後久  
寝惜すは所を失し漂々と探迷ひ。豈、豊臣氏大  
門を開らひて是を招くを以て。天下の士始て歸る  
所を知りて俄然響の如く應じて大坂に附す。是  
以大坂俄然と大きる。遂に天下を統一する所なり。  
然る秀吉も亦惟天下を統一したるの美を知りて  
人を選用するを知らざり。は、一死の後ハ三威有

樂の輩妾りふ威權ふ誇り。天下の士を輕侮を以て。  
士皆離きて徳川氏ふ歸む。是時ふ當り徳川氏人を選ふ  
ふ所にあらず。早く籠絡の網を密みて脱するを  
得ざらし。尚且後世を憂ひ。少抱ひ席と云大門を  
開き置て。努て天下の士を招き徵して大は任用  
す。是ふ於て天下の大小名より旗本ふ取る。追徳川  
氏の為す所を学んで。努て天下の士を簡拔し。是の  
時ふ當てハ六十餘州行くふとて愛士の門をき  
ふもなく。故ふ士の志を得易き未よ此時より盛

はあらざる也。是を以て天下ふ漂々の士をき。譬へ  
ハ天ふ一片の雲をきう如し。是徳川氏の永く太平  
を致せ所以也。尔後徳川氏及諸藩も門葉の年ふ増  
すを憂ひて愛士の念次第ふ多くより。天下  
諸侯の衆多す。一哀一感互ふ興りて東西伐く愛士  
の諸侯絶へざり。因え幸ふ其薦薦の氣を疎通  
せし。降りて燒季ふ及んて天下盡く徵士の門を  
塞く。是ふ於て漂士天下ふ充滿ト鬱勃の氣。天地ふ  
塞るより六十餘州物情胸然と一一日の寧キも

かりトふ。天運循環にて往きみ。大權堂々たる朝  
廷ふ復歸し。天德隆盛ふましく玉ひて人を舉み乃  
法先聖ふ倣ひ玉ひ敢て其門地を向ふ。性賢と  
不賢とを精選し。是ふ於て天下の士再び帰  
き。所を知て東西南北ふ探迷ふの憂を免せ天下  
大ふ治る。因て今も六十餘州より秀才雄智の士皆  
在京ふ集り来る。是を以て、東京の繁昌ハ日一日より  
盛也。

色箱入生娘の繫とれてんき娘の

古人も免角浮世ハ乞と酒と云一如く。乞の一宇も  
貴賤都鄙れひなへて、人の好ことあるふ。昔江戸も  
如伊もろ因いより一や、婦女子ハ極て清潔せいせきふるあ  
う一也。毛癖江戸子氣性きじゆふく表向ひらむかきハ男女互ふたごて打  
解よて中よく遊おひ戯たまむ、情頗さまよる廻りまわる。さも俗奔ふんぐん  
の様ようふ又またへもとも、もの一字を以て名を汚おす  
も、婦娘おんなの身みよりても以上もるき耻辱はずともヤ  
故たゞ假令如何いかに打解うちよて、妾めしケ石いし遊おひ戯たまむむも。ビンと  
其心そのこころ小鎧ちよねらら一いつ、脚あしと動うごくは成田なりたの不動ふどうの

様ようふて蘇張そばの辯べんも是これを口説くわだ能めぐらば、弁慶べんけいの勇いのちも是  
を擇えらうす能めぐらばの勢いきひきりいき故ゆゑ。其その身みの堅かたき  
ハ天下ぜんげ下げ小冠くびんたりたりふ。安政二年十月二日の大地震おだいちしん  
も、弁慶の勇よりハ強つようりし故ゆゑ。かく竝堅かたき操あそを  
擇離動えりふり一いつ。其その後あとと言いへハ、大震おだいちしんの時ときも、京都の  
人震後數月の間ま、又侯たはし大震おだいちしんもろとを蓋ふたみて、乞食こづけ小屋やの様成  
或もハ僅きん々ちきちの閑地ひまち、或も川岸端かわぎし、或ハ大道おおぢの側等そばへ竹たけ  
木きを架く一いつ兩戸障子よのとを蓋ふたみて、乞食こづけ小屋やの様成  
假あ小屋やを作り営くわみ。之家來ゆきの差別さべつなく、ちか屋やの中

全譜 軒

卷之三



ふ一群とちり同宿セヨリ。それ又地震よ。又震ひ出セヨと震ひ憎キ。女を男を抱きと懷きつき。頻りに春情を接離動セヨ。より。竟へす。ピンとたろセー。鍾馗ひて。江戸中怪多。嘸多。り。うとも。是も一時地震の警きみて。弛ひ一にて真心。ハあらさり。有。其後元の如く。小地震の轟多。小直。苦。小治りて跡方もちうりき。盤多。小慶應の以。諸色の高並。も。る。小因て。色の價。ハ反て。俄。小直。下けと。おも。一。洋も。瘦民の糊口。ふ苦。者。妻と。よく娘と。なく。江戸中一。

般ふ縫を售ケテ。僅ふ冻餓を免。の策と。ちや。よ。り。色の價。だ。も。賤く。ち。り。之。夫より。して。东京の女娘の風稍一變の萌を。度。一。後。ふ。至。て。ち。糊口。ふ。苦。まき。者。も。是。好。金。設。事。の。一年。役。と。悟。我。も。也。娘子を。一。て。縫。を。售。一。色。坐。て。食。ふ。の。策。と。な。れ。者。殊。多。多く。あり。ト。小。明。治。の。初。ふ。も。軍。の。駆。ふ。て。人。の。命。も。今。日。明。日。と。計。う。銷。き。征。の。抱。置。世。の。中。ふ。て。あり。ト。役。ふ。止。ま。き。而。方。も。色。を。弄。ひ。玉。ひ。て。聊。う。撃。を。遣。り。玉。ふ。故。ふ。や。色。を。買。ふ。人。全。都。ふ。備。一。故。ふ。

其勢小乘いきかへ一物を賣だる婦女。珍多めうたふ多くありたり。然  
る小淫こよを賣だる者ハ日小月とんリ富とんて、方カふ綾羅錦繡りゆうらきぬを  
纏まつひ。口くちみ山海さんかいの珍味ちんみを重つまりて、風月ふうげつに戯まわる遊あそふ。而  
古風こふうを守まつは女めのを唐糸からいとの二糸鐵ふたでてつの衣きぬさへも着き無い程  
故ゆゑ、古風こふうをぢるや誂あつひ馬鹿ばかノ歟が。且日增ふくふく小婦女おふくろの貧窮ひんきゅう  
進歩しんほして、開ひららあきあきは古風こふうをきりと西にの海うみへ門栓もんせんと  
其その危拂やくひと雇やどふて拋棄きりすてて、全まつき開化かいはの新風しんふうを掌てふ  
扱あつかひきまわまわね。些さらら不後ふご引後ひごて官禁くわんきん禁まつふて嚴げんこと姪ね。  
ろく追お開化かいは赴ひきき娘むすめ子こせ故ゆゑ、六功ろくこう小父おとう父ちち訟うたうへ昔むかの野の

寶たから乃の風かぜ不復ふく古きもろもろ我わ不好いと云いて、陰かげ不追ふ開化かいは  
の歩あゆを進すすむ様子ようしょ。因いて里さとふ小穀高こだかふるりり初はじに、開  
業きわやや婦女めの子こ等なまこ胸むね中なか未な古風こふうを懷いだく故ゆゑ人の謗ほり  
を疾うらく怨うらきて、凶あくの物ものを盜ぬすらむ如ごとく深ふかく秘ひせせ。故ゆゑ大猫  
の門もんへ來くわは足音あしおとも、獄卒ごくそつの來くわるのと怕おぞき憎にくく極きわままし  
故ゆゑ世人じにん是これを名附なづせて地獄じごくと言いへり。宜むべるる矣こけん。古賢こけんの  
隱ひより顯あらわるると言いへり如ごとく。右う乃通つうり仰あおり深ふかく秘ひ  
也れ。故ゆゑ反ひて人ひとも覺おぼらき易やすくモのを以もつて、買くふ人ひとも  
深ふかく懼おぞふ膽おのこも怕おぞれありしよ。今いま賣う淫こよの術じゆ頗まことに巧うまいと

たり、後で薄氷を踏むの危懼なく、反て衆生の煩惱を拯救せしる優遊樂境ふ遊び樂ましむるを以て、近以改称して極樂と云ふ。

果一逢ひ慮外討試一切

中古戦争の久安打續きしも君子國の支那人ふ  
ちひ称すを。我大日本國も、一時野廢の域をな  
く。故暴虐を以て反く愉快とすや。暴の善小勝  
つ能ひさるハ天道すらを以て、天鐵田氏豊臣氏の如  
き武斷勇敢の英雄を降して、盡く天下の凶暴を排

除セ。之ふ後に、徳川氏の温順慈善を以て、四  
海を愛育セ。故天下永く平戈の患を除き  
たれども、戦國武を貴むの弊風みて、野蠻の惡行又  
は後傳へ。果一逢ひ慮外討試一切の三つ也。試  
一切もハ、或ハ自分の伎量を試るたる。或ハ臆病士  
の自分の落付を試る。或も刀劍の切も味を試る  
為、又も性の凶ある者殺を好むたる等よて、暗夜み  
人通りの稀少の所に一二人に埋伏して、罪友  
き人を不意よ出て一撃之下に殺して己の為とな

すを云々。慮外討ヒハ、平民の家小ニ二本指ム對ト  
テ、僅々の失礼行キハ、其罪の輕重是非、拘ラシ。其  
場所於て並に暴殺立生ル。其主反て甚勇敢を称セ  
を云々。果一蓬とハ、二本指とニナ指と。或も途中に  
て出逢ヒ。或ハ茶酒の席上等ふて會セ。より僅の  
事件起リ。或も互フ怒リ。或も一方死を忍んで鬪  
を好まキ者とも。一方安リハ腕を扼シ。怒リて聽キ  
者等より、互に泰山より重キ一命を賭物ト。勝負  
を決チ。ア快と考るを云々。此三ノ凶暴ハ習風ト左

モノ故ニ。昔ハ怪む人も多く。反て勇者ヲの様に里  
に居りたき也。西洋の人ハ是等の暴き所為を痛く  
誹り笑て蠻夷風と云ふ。然るに今も我日本も文  
明の域となり。天下の人深く仁義の教を崇ひ。疾く  
蛮夷の風を憎み。禮讓厚く且人命を暴歎するハ凶  
惡也。より甚矣ハなきの理を明らかにするを以て。忽  
然旧習を一洗シ。士となく民となく、共に馴生交り  
甚睦處するを以て。最第一の勢とす。今ふくハ士  
と士途にふく突然遇も。果一蓬の憂ひるく。下民

と一て若士ふ失れあきも官其職を紀一甚是非を  
明ふすまよを以て命ふうはまハなく暗夜ふ乗  
ていつるる附道を行くも試一劫ふ遇ふ怕生ハ終て  
まくちり也

## 布告書

古の子ハ姑く舍て元龜天正の大亂を経て文禄慶  
長皆比々々て學文全く地を掃ふを以て流石の秀  
吉も文字ハ天下無上の有用物なるを知らさる故。  
征韓の時又當り人の一儒生を伴行て文書の事を

主ら一め玉へと勧免一城賤一ミ拒みて事成るの  
後ハ我韓人をして盡く我日本の文字を學ひ用ひ  
一むし儘漢文も用ひ一モ答へ一とそぐく開ら本  
きは時より其開らタマ努ふ隨て假名書の文章  
及て世情ふ適セーと見ヘ徳川氏初て今川氏の領  
地を手に大きられ一時一二の奉行をして代り治免  
はより鬼作左と異名を取一。本名化左衛門と云  
人をして又改代ら一免リをも化左衛門其所ふ正

り高札を作り、人を殺セハ命ハないぞ。火を放キハ  
火炙ひあざみちろぞ。狼藉らうせきをセモ作左叱しのるぞ。と大文字だいじがなみ  
書て建たてりきも。其後も誠ニよく治り一とそ。都て旧  
政府の時ひみち戦國久々打継たてつづき一後故。天下中極さまごくで  
文蒙もんもうるるを以て。一切の布告文。唯通俗計ひふくりを主と  
セ。故。其文極きまろて卑陋ひろう甚ひそ。是を以て窮鄉僻壤きゅうきょうへきりょうの名  
主も是を讀よふ苦くるもしく。一文不通もんふうの村叟里姫そんそうりけいも。先  
を讀よを閑ひまら釋然しはんと其意を永解ひなづか。得いたる様ようであ  
リ一うせ。外國人と交際こうさいをる時ときとなりてハ。餘り不

文甚しつ一けきも。外國人の笑わらとあり大おほき了國辱こくにやく。故。德  
川氏も開港かいこうの後あと。布告書中なかに許多の漢語かんごを雜まつへ。  
且文牋えんて追おい改か。移いふより一ふ。今も遐陬荒谷かうくふ玉  
了迄学校おひハるきり至いた。故。文学の道大おほく闊ひろう  
矣。世界の文明國と廣く交かふ。布告文も旧習きうしゆを一  
洗せん。粹格遠すいげきとおく漢唐かんとう小こ源げんも。是を以て規摹きばの和遠  
ある。氣勢けいせいの雄壯ゆうしやうも。語路ごろの簡雅かんがも。條理じょうりの明暢めいちらう  
をはみち支那人しれいじんも感かんする程ていも。を以て。外國人ふ  
讀よ生なても少すこ一恥はず事ことハなき也

## 手紙

前田ふ述一如く。戦國の比みも。學文地（よろこび）を掃ふ故。當時の豪傑も。手紙の文字も知らきり一ふや。大坂陳の時。徳川氏の臣（し）乃中ふても。評判高うり一豪傑。江戸の室家へ贈りけろ手紙の文ふ曰く。ゴ筆や。おきん啼（まわ）す。馬肥（い）セ年号月日と書（か）一とそ。尔後（のち）のるて。朝鮮王より舊政府へ書状來り一時。二人の老中ふ命（めぐら）一て答書（へんじ）を贈らしめあはふ。甲の老中も日本（にほん）の文學繁昌（えいこう）を示さんとて。直ふ儒臣（じゆじん）の老先生を召

レ切不命（めぐら）一て巧妙に漢文（わんぶん）を作ら一見て。唐様（とうよう）ふて書（か）一を贈りけるに。韓人反て是を笑ひりる。乙の老中も其様（よう）す事（こと）ありとも志らす。自身筆（ひら）を把りて古風（こふう）の如く和様（わよう）ふぞ。一筆啓上（ひじけいじょう）の文を作りて答へ一ふ。韓人額（ひづか）ふ蹙（つぶ）一相告て。此様子（ようざい）ふて日本も未武威感（ふわいかん）之と見へたりと云て。大ふ駭懼（じきよ）一て称揚（ちやう）セ一とそ。つく。昔も韓人反て我無骨（むこつ）あるみ忍（しの）十程（じゆう）の多ふて。天下一般ふ文蒙（ぶもん）おり一を以て。上下推るへて一筆啓上（ひじけいじょう）の外（ほか）。手紙の文法もなきものと心得居

ク一故偶漢文の尺牘を見て是れ經よりと思ひ一從  
トふ。今も俄然文字の道開り書帖も菱湖米庵等  
ハ學ふに足らずとをして、遠く古法帖を學ふ程成  
勢故遐陬海隅の賤農陋漁も皆漢語を使ふ様ふ々  
手紙の文言も夫少準して一變し、漢文偽似漢語  
雜りの尺牘を用ひは時節ともなり淑右二付亥未一  
新話あり、或時一の閑散人の手へ友人某より一封  
の書を贈りりる。其文中ふ序壯健被遊肺奉職奉悅  
喜孜と書てあり一を、閑人读見て大ふ怒りて、奉職

とハ官員の身の上ふも書へき熟字なましも。我輩  
の如き碌々たる閑散人の身の上ふも決して書へ  
き文字アリカラサ、然ニ彼者我オの上を知りな可  
ら書一も。我を侮りて、うく、セーと邪控ナ一ある  
故、其後友人ふ遇やいをや、目を瞋り、腕扼りて  
息迫其手を責問へハ、友人笑ひ答く、君幸少之  
を怒セよ、我固より奉職の字義を知らきとも、新  
板の漢語用文章中ふも多く見覺へ、且近比の人好  
て奉職の二字を用ひは故、用ひても子細ち字と心

得予も亦人真似まねして用ひたり。君きみの奉職ほうしょくの字を答  
むるふ然ぜんき、予も亦君きみが問へきの字多多くいつぞや  
君きみの贈たまり玉たまひ一書中しょくに解わかせさる文字多多くり一故。  
其手紙てうじを持行き。寺てらの老和尚ろうかうが質問しつもんセーふ。和尚も  
解わかす能のい後ご、因いて又村學究そんがくきゅうの先生せんせいに向むけひーふ。先生  
も大に困こまり果新撰かくしんざんの字書じしょを數部出だして吟味ぎんみセーし  
ふ。夫おふても解わかし得ときる文字多多くと言へへ。言への未  
詫たずらさゆり。閑人かんじん手てを拍たたて大笑おほわら笑わらひー。夫お  
尤おのの仰あおへ、右うの熟字じゅくじを予よも亦解わかせされとも、常つねに友

人間じんげんの書か中なかで多く見たる文字故ゆゑ、時の流行はうりゅうの賛さんても  
残念ざんねんの者ものあり。予よも人真似まねして用ひいた。八は君きみと烹なまを  
同ひとふせりと云いて、兩人りんじん俱ともふ腰こしを捧ささて絶倒ぜつとうしーと云  
乞食ごじき。

古老こきの嘶ひきふ。昔むか者もの某侯もしの軍師ぐんし某もしと云い者もの、徳川氏とくがわの天てん  
運うんふ合あふを悟さとり、數すう其君ききみを諫いさめーらともも聽きは故ゆゑ、  
止やむ事ことなく、窮ひきり其藩はんを遁の出でて、乞食ごじきとあり。徳川氏とくがわも彼軍師ほぐんしの力量りょうりょうを怕おのきー故ゆゑ、草くさを分わけて探さけ  
索さがえ、乞食ごじきとありを呼よびー。其意見いんべんを問たずひーふ。世

を厭ひ君を誅免スル去り今も浮世ヲ望むと答へ  
て殆遁世スル様子ヲ相違スル故命シテ乞食の長た  
らトか夫ト則ち車善七と云者の先祖ニと云へり  
此事虛ナ実ハ明タらミきム天竺ノ淨飯王メの子釋  
迦ト云ト人ト鉢セより乞食と云者御モと聞リ  
も乞食の先祖ハ聰トセー者也今試ム昔ニの乞食の  
種類を大別キきムハ有リ藉無リ藉ヲニツムトて、ニ藉又分  
て小屋持シ小屋ヲの二種トす、而して小屋持シ呼  
て番人ヲ番太ト云々、東京ヲても其長ノ名、松右衛門

を總称シテ番人トハ云チす、夫ハさて置カシ無リ藉セ乞  
食フ一テ小屋ヲ持テは者モ、皆此一類ス一テ乞食  
の巨擘也、而一て此類中フも類中ノ長アリて、長た  
了者ハ頗富リ機シきムとも、無屋ヲ乞食ヨリも反テ入  
類ヲ距シ遠ト云ヘり、然ニも舊政府ヲ於テも  
罪人ヲ刑シる時必此類ノ者ヲ役シ、又モ盜賊ヲ捕  
らヘはムも役シ、且總乞食の支配ヲ支カシムク免ム故  
自ラ權ヲ誇シ色アリて、人の門戸ヲ立テ物ヲ乞フ  
頗大面リて、祝儀不祝儀等一切人類ノ中フる事



は時より貸し物を取返によりも甚矣無理無体多くなる金錢を強請すを手柄とする惡風あり。多屋乞食俗ふ（わからひ）又（わいと）又（へいと）又（へんと）もろゝ國序より種々の名あり。此類の乞食を世襲の者も多くある雖々少く多くも人間中の懶惰者と惡病者等の流れて其類に入一者故、反て人類ふも近しと雖耕穢せすして衣食するを以て、其汚穢臭醜の甚き實小筆紙ふ述畫一難一併、何の中不も礼義ある者ふて、此類の中ふも自ら取極免ある。

故に旅乞食他より来りて其支配内を貰ひ歩くふも先其由を番人へ届か。其上其地の無屋乞食の長たる者の所へ至り恭歎禮を施し丁寧寒暖を講じ更に平安を賀し終て謹て其來意を語り其許しを受け。而る後貰ひ歩く事のことを黙らすして安り、貰ひ歩りを律を敗る者こと云て大勢打寄て辛き免ふ遇すと。関東筋の無屋乞食ハ各自勝手ふ或ひ橋上ふ伏し或ひ檐の下或ひ祠の中又ハ樹陰等ふ宿すれども中國筋の乞食を衆多群をなす。

或ハ川原、上方の川あり。常水多。故  
も好て宿。或ち火葬場等小寐泊りをなす故。夕餉よ  
乎とす。或ち火葬場等小寐泊りをなす故。夕餉よ  
り其所俄ふ賑發なり。廣き塲ふへ或ハ蚊帳紙帳等  
を張立るもあり。或ち小屋を作るも行きて。忽茲村  
部落をなす勢ハ蒙古荒日野亞非利加等の沙漠の間  
ふ住む蠻夷其の處を定めず探迷ひ歩き。俄ふ帳幕  
を張りて村落の形をなすも。うく行らんと田ハ生  
て。一入面白く見へ。也。叔乞食也。都て懶惰常と  
より。貰ひ歩くを怠りて博奕ふ耽り甚き勝負をな

すとそ然もとも固より乞食のよみて他小物をき  
故仲間の中よて典律質を入れるを取極免置。手拭ハ  
典錢幾許敗笠を何祿。藁席等を何祿と云則りて。  
互に小典一於ふとそ。而して其典セ一物を受返キ  
は乃ハ假令如何強雨強く降り。切らる。櫛。牙寒く  
とも席を着たり笠を被りたりあるよからずと云  
へり。予壯時屢東海道往来。一時ふ雲介より此斬  
を聞たり。雲介も月代贖鼻禪等の典法ありて。其物  
を典する時ハ月代も刺らきす贖鼻禪も着らきす

と云て大ふ笑ひあり。夫ハきて置、田舎小住に無屋乞食も。格の利害もあるまゝ。江戸小住者も頗る利害甚し。利とも。大店向よてより此類の中みて性の善なるを擇ひ養ひ置て。夜も其檐下ふ伏さり免て盜難を防ぐの一種の具とせり。うは飢ひ乞食も凍餓の憂ひもなく。一生安樂ふ過せり。又兩門跡淺草の如き大寺の門前ふ住む者の中ふも頗る富て車上ふ小屋を架し。意ふ任せて輒り歩き。高利の金を人類の中ふ借すを内職ふや。

者たり。而して人類の中ふて乞食の金を借り者ハ催促ふ逢ふて人笑とすを忍ま。故少一も貸す倒きハヌうりとぞ。然らハ害ハぬ何な事そと云へハ乞食ハ人類と支配を異ふを以て性の悪者ハ公盤と盜をも。或て火を放つたり。一体乞食界ふてち。大火事あれ。焼釘を拾ひ大利を得る故。大火事を名付。豊年と云ふとそ。のく豊年と名付る燈の火をも。彼徒ハ夜となく盜となく人の檐下ふ神出鬼没して火を放つ故。

至て火を放ケ易一と見へたり。盜竊をます者、形を乞食ふ佯セモ人の疑ひ寡き故。乞食と腹を併セ盜をもセ。者多うり。以上都て無籍乞食の荒増也。而て有籍の乞食も其類至て多い。中ふ就て、其一ハ千ヶ寺六部順礼等也。是等を正一き籍所と。も故ありて佛の靈場を巡拜一歩く者。其二疲民の懶惰ふ因て飢餓ふ迫り止むなく手拭を以て面を掩ひ陰ふ米錢を乞ふ者。其三浪士の糊口の藝者。き者止むなく謡ると唱ふて米錢を乞ふて天命を

貪<sup>か</sup>者甚四。地蔵薬師等の立像を丈長き箱ふ入<sup>シ</sup>。殊更美器ふ飾りたて。夫婦子供迨一齊ふ繪草紙中よ画<sup>シ</sup>。六部の様<sup>ス</sup>は出て立<sup>ヒ</sup>て。さも<sup>ハ</sup>幾心者。しく見せうけ貰ひ歩く。是ハ全く乞食中の奸黠<sup>ク</sup>者ふ。一て佛を售りて世渡りをもす者。其他道樂寺の一派あり。俗傳ふ接<sup>シ</sup>ハ上野の宮様ふ縁故。なりて一派を立<sup>ヒ</sup>と云へり。此徒今も二派ふ今<sup>シ</sup>。顯然<sup>ハ</sup>一宗門を開<sup>カ</sup>く。夫ハ則阿保多羅經を讀<sup>ミ</sup>歩く者と伊努<sup>ハ</sup>んとと云哥を謡ひ踊<sup>リ</sup>歩く者と

よ一て、釋迦の徒しゆの中なかにてハ、最さいオ一の開化宗かいかくそうを弘通こうとうする者也。右の如く昔も乞食界頗まことに繁昌はんじょうす。今も皆釈迦如來の功德ごくくみ因いんじる盈えいけ生うとも。今も釋迦の宿言ねごんも人の信仰しんこうせ。ぬ時節じせつとよりより。一切さへの乞食きじき悉ごと皆人類じんるいふ飯まいして、開化の恩澤おんたくを蒙うけむるを以て、乞食と云いふハ總だまてよく、唯橋側ばしわきふ坐すわし。或ハ小桶こひげふ拾四五足そくの乞食きじきを入いれき。或も四五箇さへの崩くず藁わらをさら籠くわ。或も五六把さへの附木つきのきを破箱はくばの背せふらり垂たれて、往來わんりようの人を視見てて百拜ひやくはいして、買いふ事を取とふもの

可憐かれんの小賈人あきひとと寺門の側わきふ立て、空念佛うつぶんぶつを唱うたへる、空信者くわんしんしゃの老嫗おとめ斗とうりらる也。

獻書けんしょの難むずかと易やす

辭ことと文字とハ畢竟意ひきにを通とお一事を辨べんするの道具どうぐ故ゆゑ、玄達げんたつトヨタマよたまヘへを生なむ。夫おれみてよきよきのちのちに、開あらああは世よの辭ことにて、御おの字じと様ようの字じとハ幾許いくそくの書か法ほうあり。天子將軍てんしおうぐんふハうくの如きごとき拂は様ようを書かく。下人しもひとふも彼かれ様ようの臣しも様ようを用もちへきこと。徒たうふ枝葉えりはの辯べんふ心こころを費う。唐から様ようハ書かくと相成あつらす和わ様よう可こ

限るまゝ、齊のくらきる天下の人をして強て齊  
しのうらためんとするハ畢竟道理の開きあきはに  
因て也。然りと雖是も害の小ちる者、豈害と云すふ  
足らん也。抑害の大ちりハ届書、願書、訟書等都て  
無例の例なりて下より上へ出ぬふの書類を役  
人の意ふ適セキシハ幾度となく返して幾回と至  
く書改め一毫忙友人をして空費時日を費さむむ  
了是也。因て幾回も書改むるを憂ひて或ち其役人  
より陰ふ請て下書を得、或ハ其掛りの人をして代

り書一むきハ多故よく納る故、其掛りの人の代書  
と請ひ得一下書とハ我書一ふ優り、且別ふ文例あ  
るかと里へハ左ハちくじて何の文例もなく、且不  
文甚り。因て其意を推て考へ見きハ別ふ趣意ハな  
く、唯漫ふ難題を言掛て夫を以て上の威光を示し  
手段ふてほりは加く上の威光を示し為ふ、僅二  
三の字句の間ふ說をほす。難題を云掛て高立の米  
を食ふ人をして、空寂時日を消せしえて敢て顧み  
はるか畢竟人の憂ひを以ての樂とす者也。然

るに今も文明開化の域をはふ因て天下の人をして、空費時日を費さむるを以て害の尤も甚者とぞろ故ニ奏文訟書等の類都て和文漢文及唐様和様の差別なく、特ニ其人のよし得るふを隨て其書を作らしめて敢て文例の如何を咎めず。大失礼大失禮の外も盡く受納て再び書改めしむるなきも空費時日を移さむるを憂ひ玉ひし也。ろく空費時日を移さむるを憂ふも敢て昔ふ反ちまつて云ふあらずして夫則開化世界の當然の理なるべし

